

ともに生きる社会推進特別委員会県内調査報告書

平成30年10月23日(火)に、「津久井やまゆり園の再生について」、「障がい者施策の推進について」及び「ともに生きる社会の推進について」について調査を実施したところ、その概要は次のとおりでした。

神奈川県議会議長 桐生秀昭 殿

ともに生きる社会推進特別委員会 委員長 あらい絹世

ともに生きる社会推進特別委員会
県内調査報告書

平成30年10月23日（火）

1 調査の概要

- (1) 調査箇所 津久井やまゆり園が谷園舎、NPO法人ふかふか
- (2) 出席委員 あらい委員長、米村副委員長、
武田、石川(巧)、内田、しきだ、久保寺、
岸部、佐々木(正)、日下の各委員
- (3) 調査日 平成30年10月23日(火)

2 津久井やまゆり園が谷園舎

(1) 調査目的

津久井やまゆり園が谷園舎は、平成28年7月26日に津久井やまゆり園事件が発生したことにより、同園で生活する方々の仮居住先として旧県立ひばりが丘学園施設を利用して、平成29年4月より運営を開始している。

そこで、津久井やまゆり園が谷園舎における入居者及びその家族への支援の取組を調査することにより、今後の本県における津久井やまゆり園の再生についての取組に関する委員会調査の参考に資する。

(2) 主な説明項目

ア 芹が谷園舎について

施設入所支援、生活介護及び診療を行っており、短期入所については現在休止している。

イ 施設入所支援について

障害者の居住の場として、夜間や休日の食事、入浴及び排泄等の介助を行う。芹が谷園舎では6箇所の寮に分かれており、寮内は居室、食堂、リビング、浴室、トイレ等の生活に必要な設備がある。

ウ 生活介護について

日中活動の場として、食事、入浴等の介助や日常生活の支援の提供に併せて個々の能力、特性、または希望に応じたグループに分かれて、歩行・機能維持の運動といった体を動かすことから、スキルスクリーン、刺しゅう、手芸等といった創作活動や園芸作業など幅広く、利用者にとって楽しく充実した日々を過ごせるように支援している。

(3) 主な質疑応答

質 疑 150人から160人くらい生活している人がいるが、1年に何人くらいが家庭や地域に戻って生活をしているのか。

応 答 平成21年度にグループホームを立ち上げて、現在25名の定員のグループホームを運営している。その中で施設からグループホームへ移る方、在宅でもグループホームで暮らしたいという方がいるので、24名全員が施設から移った方ではない。24名中16名が津久井やまゆり園か

ら移った。毎年一人ずつといったペースではないが、新しいグループホームが一つ立ち上がると、その年には2人とか3人とか複数名が移行する。定員がいっぱいになると、なかなか次の席が空くまでは移行ができない。かながわ共同会が運営していないグループホームに移るということは、事件前はあまり例がなかったが、芹が谷園舎に来てからは1人移っている。本来計画的に、今年度は何人に地域で暮らしていただきましょうというのがいいのかもしれないが、家族、本人の意向に沿って進めているので、数字的な計画は立てにくいと感じている。

質 疑 意思決定支援について、厚労省のスキームの下で進めていると思うが、進めている中で少し違う、改良しないといけないといった点はあるか。

応 答 国のガイドラインに沿って意思決定支援のシステムが進んでいくわけだが、津久井やまゆり園で進めている意思決定支援は県に協力していただいて平成33年度に新しい施設ができるまでに、本人の思いをくみ取るというかなり短期的な取組という点では特徴的だと思っている。今回津久井やまゆり園が取り組んでいることをベースにして今後、他の施設などでも、意思決定支援に取り組むときのマニュアルというか、取組に当たってこういうことを心掛けましょうといったものを園が先駆けてまとめていくような役割があると思っている。今回、県から意思決定支援の専門の職員の配置とか相談支援専門員の増配置など業務委託契約を結んだりしていて、平成33年度までの短期の間になるべく他の施設の方々、ご家族やご本人さんたちが安心して取り組める意思決定支援のいろはをまとめあげるようにしたい。担当者会議という表現だが、この芹が谷園舎でも毎日3回から4回くらい担当者会議をやっており、県の方にも出席してもらっている。県も一緒になって進捗状況を見守っていただいているところである。

質 疑 意思決定支援の進捗状況が当初の予定より遅れている。当然、丁寧に対応してくことを最優先に考えていけば、結果的には妥当な対応、判断だと思っている。ペースを速めてやるよりも、日によって状況も違うし、丁寧な見守り方も必要となるので、そういう意味ではそのような対応には感謝する。千木良と芹が谷、そして近隣のグループホームと行き来ができるような仕組みづくりを計画の中で打ち出しているが、入所者の状況は体調の変化などにより変わるわけだから、今回打ち出された基本構想の整備方針において、入所者については、想定以上の多様な受入態勢も必要ではないかと改めて感じているが、意思決定支援を進めていく中で、今の時点で、基本構想の改善が必要では

ないかとか、当初の基本構想でいいのか、微修正を加えるべきではないかといった受け止め方があれば伺いたい。

応 答 共生社会推進課の職員と定期的に打合せをしており、意思決定支援の担当者は担当同士で月に何度も打合せをしており、新施設建設については毎日のようにやり取りをしている。また、まとめて共生社会推進課と園長、部長で毎月やっており、年に何回かは常務にも出席してもらう会議を今年度からやっている。委員が言うように、課題は多く、9月に県と一緒に家族会への説明会を行ったところ、ご家族の皆さんも早く安心したいというところがいろいろと出ていたので、共生社会推進課も県全体でその辺の課題についてはつかんでいただけていると感じている。

上記以外の質疑については、現場視察中に各自行った。



(4) 調査結果

津久井やまゆり園が谷園舎では、障害者が充実した日々を送れるようにするために施設での支援の充実を図る一方で、障害者本人及びその家族に対しての相談支援や、津久井やまゆり園事件後、職員に対する心のケアを行っていた。

津久井やまゆり園が谷園舎における入居者及びその家族への支援の取組を調査することにより、本県の今後の施策を調査する上で、参考に資することができた。

3 NPO法人ぷかぷか

(1) 調査目的

NPO法人ぷかぷかは、障害のある人たちと一緒に生きていった方がいいという理念の下、パン屋、総菜屋、アート屋等を運営しており、障害者と職員と一緒に働いている。

そこで、障害者の働く店を運営することによって、障害者と地域の人が出会う機会を提供するという取組を視察することにより、今後の本県におけるともに生きる社会の推進についての取組に関する委員会調査の参考に資する。

(2) 主な説明項目

障害者の給料については、来たら1日1,000円、20日来れば2万円という形でやっている。また、ぷかぷかに来ている方は基本的に自立で通える方だが、発作のある方もいるので付き添いがいる方もいる。遠い方では、1時間半くらいかけて来ている方もいる。

また、ぷかぷかはどのような障害者にも規制をかけずに受け入れているため、居心地が良いと思われる。そのため、本人が就職を希望する場合は別だが、現在は定員が一杯のため、新規での受け入れは行っていない。

カフェバーカーリーぷかぷかのパンはお店だけでなく、区役所、子育て拠点、養護学校等でも販売している。また、毎週販売に行っている瀬谷区役所では、販売を始めた当初の売上げが5,000円だったのが、4年経過した現在では、10倍の50,000円を超える日もあり、これらは、障害者の方たちにまた会いたいといって来てくれるリピーターの獲得によるものが大きいと考えている。

(3) 主な質疑応答

質 疑 学生もぷかぷかを見学、視察に来ているとのことだが、障害者を社会で受け入れることを実践している様子を若い人たちが見て、どのような変化があったか。

応 答 若者だけでなく、関わっている人はどんどん変わってきている。毎日クリームパンを買いに来てくれていた方は、毎日ぷかぷかで話をし、アートのワークショップに参加するようになり、演劇のワークショップにも参加するようになり、半年かけて芝居をつくり、舞台をやるまでになった。単にクリームパンを買いに来ていただけの客が、それぐらい変わった。昨日来た若い女性の方はこの雰囲気感動したのか涙を流していた。福祉事業所から来たというのが、そことの差があったようだ。

質 疑 見学の申し込みは多いか。

応 答 大学の哲学対話をやっている人から、ここで対話をやりたいとの話があった。その記録映画を撮り、今度大学で上映する。対話を通して

関係をつくっていく。それは上から目線ではなく、一緒に対話をするというピュアな関係である。彼らはそうやって向き合ってくれたので良かった。

質 疑 人を耕すというところで、今、地域移行という流れになっている中で、団地の集合住宅、このような場所にふかふかを構えて、最初は大声を出す子がいて近所に謝りに行っていたとおっしゃっていたが、人を耕すということで地域の方がどのように慣れてきたのか。地域移行ということのモデルケースになる非常に大事なことだと思った。地域の人に受け入れてもらう過程というか、最初はうるさいと言われ謝りに行っていたが、それがだんだん地域の人々が耕されていったのか、その辺の住民のみなさんの協力度、クリームパンを買いに来た人みたいになったのか、無関心層にどのように展開し、ここに住民として根付いていったのか。

応 答 私は教員しかやっていないので、パン屋をやるときに接客をどのようにやっていいか分からなかった。そこで接客の講師を呼んで講習会をやった。マニュアルがあって言う言葉も決まっている。素晴らしい接客ができるかなと思ったが、実際ふかふかをやってみたら、自分の感覚では気色悪かった。つまり、マニュアルに合わせようとして自分を押し殺している。私は彼らにほれ込んでパン屋を始めたが、自分を押し殺してマニュアル通りやると気色悪く、白々しい。そこで、講師を断って自分たちでやろうと、最低限、お客さんに不愉快な思いをさせなければいいと一つだけ決めて、あとは任せた。接客もできない店かと、客に帰られてしまうリスク100%でやったが、なんとファンができた。うちは気持ちがこもっている、カタカタ震えながらも思いが伝わってくる、一生懸命さが伝わってくるということでファンが増えた。緑区役所へ売りに出すと、15団体くらいが販売をしている中、うちには行列ができる。なぜだろうかと障害福祉課の課長と話をしたところ、楽しそうに働いている、知っている客が来るとハイタッチをしている。そんな店はない。しかし、それが楽しい。一般的には、障害者は社会に合わせないといけないと言いながらも、客はふかふかに来る。要するに、そのままの彼らが一番魅力的、ホッとするものがある。先日市議員の方が、彼らが描いた絵を見て、これは指導しているのかと聞いてきた。指導していたらそのような絵は描けない、彼らのありのままの絵だからホッとできる。彼らにはそのような力がある、そこを信じるかどうかとだと思ふ。十日市場の駅の周辺にも、福祉事業所がやっているカフェとパン屋があるが、そこの客がふかふかに来る

とホッとするとする。その店はきちんとやっている、メンバーの横にスタッフがいて絶対間違えないようにしている。区役所の外販に行っても、礼儀正しくマニュアル通りちゃんと両手をそろえ、にこにこしながら、丁寧語でやっている。うちはそうではないが、客はちゃんと来る。だから、共生社会というのは、お互い緩い関係で知り合い、一緒にいるといいよねという社会ではないかと思う。そういう意味では、ここは客といい出会いができるからファンが増えている、そのファンのおかげでこの店も持っている感じである。

上記以外の質疑については、現場視察中に各自行った。



(4) 調査結果

NPO法人ふかふかでは障害者の方が働ける場を運営し、社会の中で働くことを通じ、障害のある方とない方の接する場を提供していた。また、運営するパン屋では、マニュアル通りの接客ではなく、障害者一人一人の個性を生かした接客により、パンの売り上げが増加するといった結果も得られていた。

NPO法人ふかふかにおいて、ともに生きる社会の推進についての取組を調査することにより、本県の今後の施策を調査する上で、参考に資することができた。

<参考>

- 1 随行者 星主事（議会局議事課）、
平野主幹（福祉子どもみらい局共生社会推進課）、
上西主幹（教育局総務室）

- 2 調査箇所側出席者
 - (1) 津久井やまゆり園芹が谷園舎
理事長、園長、新施設建築担当部長、総務部長
 - (2) NPO法人ふかふか
理事長、プロダクトマネージャー